

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和十二年五月廿日印刷納本昭和十二年六月一日發行

第十三卷 第六號

浄土

六月號



目次	
生きるといふこと……………	(二)
中村辨康	
白鷺……………	(四)
吉田絃二郎	
詩と感想……………	(六)
永見七郎	
回教徒と習慣……………	(八)
村岡宏純	
信仰相談……………	(一〇)
中村辨康	
浄土讃歌……………	(二三)
鳴海要吉	
救ひ……………	(二四)
瀧川駿一	
苑文	

法然上人鑽仰會發行

『生きる』といふこと

中村 辨 康

「息」即ち呼吸することは直ちに「生きる」ことを意味する。息がつけなければ生物は生きられない。だからこそ「息」と「生」とは同じ読みかたである。また二つ合せて生きること、を「生息」とも云つて居るのである。

ところが、この息は自分一人でやつて居るやうに見えるが實は天地に關係して居るのである。即ち動物は酸素を吸つて炭酸瓦斯を吐いて居り、植物は炭酸瓦斯を吸つて酸素を吐いて居るのであつて、動物と植物とは直接に呼吸を交換し合つて居るものである。それはまた太陽の光と熱となくしては出來ないことであり、大地と水となくしては出來ないことであり、食物や肥料なくしては出來ないことであつて、段々それからそれへと關係をたどつて行けば天地の一切に關係して居ることが明かになる。されば私達は決して獨り立ちのものではないのである。

しかも此のからだの存続には定められた制限があつて永遠には續けられないのである。それが即ち普通に云ふ「壽命」のことである。

然るにこの壽命は毎日々々を重ねたもので、それを一般に「生きて行く」と考へて居るのであるが、實際には一日一日

をへらしつゝ居ることであるから「死につゝある」とも云へるのであつて、それを「生活」と云つて居るけれども、本當はプラトンの云つたやうに「みんな墓場に急いで居る」譯のものである。

泣いても笑つても時間はドンドン過ぎて行くのである。然かも一たび過ぐれば再びかへらぬ時間である。取り返しは絶對に出來ない。それゆへ私達は眠つて居る間も實は「いのちがけ」なのである。休養の時間もまたいのちがけなのである。と云つて何時も緊張して居れと云ふ譯ではない。弓の弦をかけつばなしにして置けば弓が駄目になるやうに、緊張を繼續することは本當の能率にはならない。それ故その休養を有効にして次の緊張に役立たせなくてはならない。

また私達は自らを「自分」と云つて居る。即ち「分けられたもの」だからである。からだも、食物も、衣類も、住居も分けられたものであるが、その最も基本的なものは「いのち」の分けられたことである。だからこの分けられた貴い命を最も有効にそして最も有利に使はないのは嘘である。

凡そ天地間に於て一切の事物は皆な悉く變化して居る。そして成（出來上がること）住（變化しながらも形をたもつて

居ること) 壞(段々壞滅に近づいて行くこと) 滅(すつかり死滅してしまふこと) の四通りの経過を繰返しつゝ生き死をして居り新陳代謝をして居るのである。然しながらこの變化の中に變化しないものが二つある。その一つは推移すること即ち時間と云ふことであり、他の一つは事物の容れものであるところの空間そのものである。私達はこの時空の二つの中に然かもそれを基盤として分け生かされて居るのである。

それ故この時空は私達一切現象の「生みの親」であり「育ての親」である。この生みの親、育ての親を單に表面的な科學の眼で見れば、唯だの空間であり唯だの時間であるけれどもこの時間空間に依て生み出され育てられて行く一切生物は(或は礦物でも)一つの意欲を以て生活しつゝあることを考へると、單なる時空とのみ片付けられないものがある。

即ち一切のものは質を同じうするものに集合せんとし共同せんとし、そこに相互扶助があり、他との間に生存競争があり互に向上發展せんとして居る。かうした意欲は天地間の綜合意志とも見えるし、また天地に内在する一つの力とも見えるのである。

然らばその力を人格化するとき、空間的には無量光、時間的には無量壽となるから、この壽光の二つを合せて「阿彌陀佛」と云ふ統一體を考へることは、決して無理ではないと思ふ。またそこに歸依の感情が湧きさへすれば宗教が成立するのである。

かくて私達はこの「阿彌陀佛」の無量壽の一分を受けて、

五十年なり七十年の壽命を保持して居り、此の壽命の一分たる毎日毎日を充分有効に使用して無駄なからしめなくては人間の本當の價値に生きて居るものでないことは、前述する通りではあるが、然し實際生活となると中々さう理想的には行かないのであつて、常に謂ゆる煩惱に悩まされ、本當に「生きる」ことが出來得ない状態である。

それ故無量壽の絶大なる力に歸一せんと願ひが起り、その念願を以て一心に「歸命無量壽覺」即ち南無阿彌陀佛と念じて行く宗教的行爲が必要となつて来る。

この願望は私達が生きる上に絶對的に必要のものである。若し私達にこの願望が無くなれば私達は最早や本當に生きる資格を失つたことにさへなると思ふ。

それ故「歸命」即ち「大生命に歸一せん」とする「南無」の願望こそは私達の本當に生きんとするところを表現したものであり、この宗教信仰に依つて初めて人間らしさを保つことが出來、本當に生きるめどがつくわけである。さもなければ本當に生きやうとしても、頭で考へて居るだけになつて、事實は煩惱にさまたげられ左右されて本當には生きられないのである。泣いても笑つても過ぎ行く私達の壽命である。せめては大御命に歸する南無の念願を以て生きて行きたいものである。理窟より何よりそれが私達に一番可能なことだからである。この念願の「南無」は、やがて感謝の南無ともなり咨嗟の「南無」ともなつて發展し行くものである。



白

鷺

吉田 絃二郎

白鷺はたいてい群をなしてゐる。そして一番ひづゝを
るのが普通のやうに見える。

つい、この間のことであるが、多磨の田圃を歩いてゐ
て、たゞ一羽の白鷺がぼつねんと、田圃に下りてゐるの
を見た。

その翌日もわたくしは多磨の田圃を歩いてゐて、たゞ
一羽の白鷺がぼつねんと田の中の下り立つてゐるのを見
た。

さらにその翌日もわたくしは同じ田圃にたゞ一羽の白
鷺が寂然として、もの思ふがごとく、佇んでゐるのを見
た。

かれはその配偶を失つたのであらうか。

かれはたゞひとり黙々として、還り來ぬ妻を思ひつゝ
あるのであらうか。

畜類にはこゝろなしと考へる人も多いであらう。しか
し畜類の夫婦の情はなまじい人間よりもこまやかなもの

があるのではないだらうか。

多磨川に野毛の渡し場といふのががある。二子と丸子の
中間である。もう三十年も前のことであつた。一獵人は
渡し場近くで雌雄一番ひの鴨を發見して、その雌鴨を撃
ちとめた。かれは流れに入つて雌鴨を拾ひ上げた。不思
議にも死骸には首がなかつた。日は暮れかゝつてゐたし
獵人はそのまゝ家にかへつて行つた。

二ヶ月ばかりの後、かれはふたゝび野毛の渡し場に行
つて見た。雄鴨がたゞ一羽川に下りてゐた。かれは雄鴨
を撃つた。獵人はよろこんで、雄鴨を拾ひ上げた。しか
しかれが驚いたことには、干乾びた雌鴨の首がその翅の
下に抱かれてゐたことであつた。

かれはつひにその日から獵銃を捨てゝしまつた。

この話はその獵人自身の手記になるものを、すつと以
前にわたくしは讀んだことがある。

「獵人日記」の作者ツルゲーネフにも、かれが獵銃を捨

てた原因として鳥の哀話が傳へられてある。

詩人佛山と蝮の話については前に「浄土」に書いたことがあつたと思ふ。

子供たちが殺さうとしてゐる蝮を助けて、持ちかへり飼つて置いたといふ話である。

わたくしは十年前の初夏散歩の小徑で、とぐろを卷いてゐる蝮を見たがそのまゝ歸つて來た。

途中で逢つた若い農夫にそのことを告げたら、かれは俄に駆け出して行つたが、もう蝮の姿は見えなかつたといふことであつた。

その時若い農夫はわたくしにかう言つて、不平さうな顔をした。

「旦那、蝮を見つけたら必ず殺さなけや駄目ですよ。殺さないで置くと、他の人が難儀をしますからなあ」

成る程、若い農夫の言葉には道理があると思つた。

ところが、この夏の初めの或る日わたくしは裏の畑の木戸を明けて散歩に出かけようとした。すると木戸を明けた刹那、つひ、足もとに音を立てゝ落ちたものがある。

わたくしは自分の眼を疑はざるを得なかつた。蝮である。木戸に這つてゐたのか、或ひは木戸の上にかぶさつてゐる楓の枝から落ちたのか、ともかく一足の蝮である。

蝮はそこにとぐろを卷いたまゝ動かない。恰度畑の外を通りかゝつた顔見知りの農夫に手傳つて殺してもらつた。三四十年も前までは多磨の田圃には蝮が多くゐて困つたことなどを語りつゝ農夫は歸つて行つた。

さて、わたくし獨りになつて死んだ蝮を見てゐると、流石に蝮は美しい。形は小ひさく、他の蝮とちがつてぶざまなところがない。斑紋も鼈甲のやうで美しい。殺したことがすまないやうにも思はれる。

蝮に何の悪いところがあらう。蝮は人に噛みつかねばならぬやうに生みつけられてゐるのだ。悲しい宿命に生みつけられてゐるのだ。

人間はまた安全に生きて行くために蝮を殺さなければならぬのだ。蝮に對する恐怖から解放されると同時に寂しいものがわたくしの胸に泛かんで來た。

わたくしは詩人佛山のことを思ひ出した。

蝮は佛山に馴れ、人を噛むこともなくなつた。ところが或る夜、佛山が外出先から歸つて來たので、蝮は佛山を迎へるつもりで巢を出たが、暗がりのことで佛山に踏まれた。蝮は思はず佛山の足をちよつと噛んだ。佛山は「この恩知らず、早く巢にかへつて寝ろ。」

といつて叱つた。蝮はすごすごと巢にかへつて行つたが、翌朝になつて、自分で自分のからだを噛みきつて死んでゐた。

わたくしはひそかに蝮のために念佛申した。

感想と詩

永見七郎

心愛に満ちる時、喜びがおとづれる。心がいつも愛に溢れていたなら、人生はどんなに楽しいだろう。私にもその秘密はわかつているのだ。わかつていながら私はいつも悩んでばかりいる。憎んだり、怠けたり、不平を言ったり、私は苦しんでばかりいる。

○

私は仕事の都合で毎週二日づつ御成門の近くへ通っているが、暇をぬすんで増上寺へ参るのが一つの楽しみになつてゐる。天氣のいい時は勿論、雨の日でもこつそり山門をくぐる。散歩しようといえ、友達もついて来るとかも知れないのだが、私はわざと一人でくぐることが多い。こんなことを書いては住職の方々に申譯がないが、増上寺の焼けたことは私にとつてよかつた。あの大きな山門の中に立派な本堂のあつた頃は、私にとつてもその門をくぐる気にはなれなかつた。よその大邸宅へでも入つていくようで何だか仰々しく大儀だつた。しかしこの

頃、今焼け跡となつたあの石段を私は何の恐れもなくのぼることが出来る。そして誰はばかりのことなくづか／＼奥へいつて、静かにあの御本尊に合掌することとも出来る。私は佛教徒ではないが、あの小さなお堂の中に窮屈そうに坐つて居られる御本尊は何と親しく優し氣である。私はけちで捧げ物もせず、たまにそこいらに咲いてゐる野草を一本持つていくだけだが、何ともいえない洗われたような氣持ちになる。御本尊は私を許すとはいわず、黙つて居られる。だが、私は一寸甘えるような氣持ちで私の悩みを訴え、罪の許しをお願いする。そして何か生きる勇氣のようなものをさえもらつて歸ることが多い。いつか住職の方に會つてお禮を言いたいと思ひながら、何だか耻づかしいようで黙つてゐる。私は信仰のソレ泥というような言葉を思いついた。秋から春、春から夏へ、私の我儘なひそかな参詣はもうちき一年になる。

○

宗教の街頭進出ということが言われ、その意味もわかるが、私には何だかびつたりしない。宗教は寺院の中にもまして街頭にもないのではなからうか。それは人生の中にさえない。あるとすれば永遠の相の中にある。だが本當を言うと、宗教を語ることがすでに愚かであるかも知れない。説教はそれが上手であればある程馬鹿げたものだ。クエーカーは沈黙の使徒であつた。沈黙こそ宗教にふさわしいのだ。

○

九十を越したヨハネはもう説教をしなかつたそうだ。老いたる彼は、眼に涙をためて、「人々よ愛しあつてくれ」とつぶやいていたのみだそうだ。

○

デカルトとライプニッツとは神の存在を實證するため生命がけで努力したが、スピノザはガラスをみがいていただけだつた。しかも彼は神に酔つていたと伝えられている。神は彼にとつて出發であり、歸結ではなかつた。

名もなき山にも神は光りを與え、雨を注ぎ給えり

名もなき山に落ちし種子は生えしげりて、林となり森となれり

名もなき山は育ちたり、育ちて緑の山となりたり
人に氣づかざれどその美しさ限りなし

名もなき山にも春は來りて、名もなき小鳥は歌えり
平和、平和、平和
その聲は靜かに梢にこだませり

名もなき山の夏は盛んにして、名もなき草木茂りたり
その盛んなる姿
輝かしき生命は全山に溢れたり

名もなき山に秋は來り、名もなき虫のすだく

名もなき山の虫の聲は盛んにしてその楽しさ限りなく
さながら生命の讃歌の如し

名もなき山を訪れし名もなき旅人は、その美しさに驚き、その楽しさに喜び、涙ぐみて讃美の詩を書くなり

名もなき旅人の詩囊は貧しけれど、溢るる喜びせきあえす

「自然は美し、自然は美し、生きることとは樂し、生きることとは樂し」

とくり返し一篇の詩を捧ぐるなり

名もなき山に年はふりて、今年も冬とはなりぬ

名もなき山は雪につつまれて今は訪う人もなし

されど名もなき山は壯嚴さ限りなく、老いたる神の如

き姿となりぬ

我もまた名もなき山に傲わんかな(四七、六、一八夜)



私の見た回教徒と慣習

村 岡 孝 純

回教と言つても私の南方生活四ヶ年に見て來た體驗して來た一部を披歴しやう。南方もスマトラ島あの落下傘で一躍を名を出した「ガツリン」の都バレンバン市周邊の唯一角の慣習にすぎざるも、その住民の信仰心の一端に依り回教の精體の浸透せる事がうかがはれよう。

回教は、周知の如くアラビヤ人、ムハメットの創始に依り、その經典は可蘭である。

即ち「イスラム」であつて、唯一の神「アラー」に對する絶對歸依である。

現在の世界の一切の諸相、日常社會生活は各個人精神まで凡て「アラー」の支配下に在ると信じて疑はない。これが回教（徒）の根本觀念である。

回教教義の主體は「信仰」と「勤行」の二つに區分される。即ち「信」「行」の二である。

信仰は、六信即ち、神、天使、經典、豫言者、來世、天命を説いてあるやうであるが、私はこの信仰が果して、どの程度に深きかは斷定出來ざるも、次に來る「行」に依りそのいかに流入されあるかを知る事が出來ると思ふ。

勤行は、五行即ち、祈禱、禮拜、斷食、喜捨、巡禮の五つである。

私の眼前に今尙現れるものは、この祈禱と禮拜である。この二行たるや全住民全く狂信的と云つても過言ではあるまい。而して私ら佛教家が、この「二行」と「斷食」の徹底にふれたとき全回教民衆に自ら頭が下り、尊敬心さへ湧き出づるのである。

禮拜は彼等の信仰の現はれとして表現され、信仰の力を發露するもので、……毎金曜日は全業務を休み、上装に着飾つて各回教堂へ參詣し禮拜の行を行ふものである（金曜日を禮拜日と稱す）（禮拜の様式は粗末な敷物を用ひ「アラビヤ」の教祖の國の方向に對して數十回數百回の禮拜を行ふ……同時に經文を唱へつつ）尙無學の原住民も教祖の國の方角のみは確實に知つてゐる事は、全く禮拜のしからしむるものである。

斷食行 俗に言ふ「ブアサ」である。回教徒の最大の祭行事である日本曆（回教歴を用ひるが）の概ね九月一日からと思へば大差ない。三十日間全インドネシア民衆が行ふ。日中は食事をとらず眞夜中と夜明前の二回のみである。而して一日五回禮拜を行ふ。（吾々の加行の時の禮拜を想起すれば可なり、但し一日六時でなく五時の禮拜と想ふ可し、一時の禮拜數は何十何百宛であり、教會はそろつて家内では單獨とまちまちである。但しこれは僧侶のみでなく全民衆が一ヶ月行ふ事

を重言する。

この一ヶ月の行事が終ると、「ブアサ明け」と言つて翌概ね十月一日が彼等の正月である。

以上の如く、祈禱、禮拜、斷食の三行に依つても、如何に回教が民衆の生活の中に在るやの一端がうかがはれよう。……喜捨、巡禮に對しては一回の經驗も得る事が出来なかつた。

又一面には割禮と云ふ行事があり、吾々の得度、昔の十五歳の元服とも云へよう。これは彼等教徒の子供で六七歳から十二三歳までに行ふ様である。村々毎にこの幼男女の陰部に對して鉄を入れる事で、僧侶(ハヂ)が立會ふ。これによつて一人前になるわけである。

この外に宗教より生じたる生活慣習は數知れず、一二の例を述べれば食物では「豚」を食はない、見る事も嫌ふ、觸れたら最後一日三回砂で體を洗つて水浴し七日間續ける。「龜」も食はない(但し牛肉は喜んで喰ふ)酒類も禁止されてゐる。

反面妻は正妻を四人まで持てる。四人以上は決して持つてはならぬ女の方に向つて放尿禁止。右手のみにて他人に對し左手を使用せぬ。犬の唾を嫌ふ——の如く凡て宗教の慣習が自然と結合して生活の中に解け込んでゐるし、謂は彼等回教徒は戒律の中に生れ戒律の中に育まれ、戒律の中に生活して行く民衆である。吾等が若し南方にて一日も生活せんと欲せば彼等の宗教慣習を第一に吾身につけなければ生活は出来ないと言つて過言であるまい。大乘佛教徒から見れば全く想像出来ないものがある。

死に對する葬儀は實に簡單であつて反つて奇異の感さへある。(特に華僑の葬儀と比較する時)

斯の如く生活と回教の結合は緊密なものである。要するに回教あつ

て生活が安定され、生活は又回教なくして存立しないと云ふのが回教の根本となつてゐるのである。以上が私の見つつ體驗せる回教徒の宗教による生活慣習である。

唯最後に終戦と共に、彼等回教徒が、引揚日本人の家族として、隨伴したるもの少數にあらざる事を私は信ずる。私の復員の際は、九州の某縣行きの一箱の列車にのみ十五名の回教婦人が居た。又かつて某新聞は「和歌山の復員港には日本を頼つて來た彼等四十數名の行方 hands を焼きつつある」と、私等はかくの如き實情を見る時、その儘放つておけるであらうか。「某新聞は彼等の爲に連盟を結成中」とか——彼等は上陸と共に上は食事の様式から下は不淨の様式まで異にする事を想へば彼等の苦澁の様が想像出来る。前述の如く彼等に宗教を抜きにしては何物も残り得ない。彼等に「祈」と「禮拜」を抜いたら生活力を失つたも同然である。

日本には東京と神戸に二ヶ寺の回教寺院は有するが、——私の見た所は、九州方面へ落着いた大多數の生活を想ふ時、——九州の善導寺の一隅でも可なり、かの森嚴の地に彼等の禮拜堂の一つも提供してはと江藤僧正否蓋宗の識者に希ふものである——一間の六角堂で可なり。斷食間でも結構——

彼等をして存分に禮拜を興へる事こそ、佛教徒の最大の慰安の道であらう事を確信するものである。然して又現地にある彼等回教徒と新日本建設の爲に宗教による精神のつながりを結び得る時こそ、宗教に依る平和日本への道が拓かれることを覺醒し、一層の努力の筈ともなるであらう。

(禮拜時に唱へる經文等記錄せる書類一切終戦と同時に焼却せる爲、詳細な參考に供する事が出来ず残念である)

信仰相談

信仰と神秘

擔當 中村 辨 康

(問)

宗教に神秘的要素がない
と強い信仰にはならない
やうに存じます。如何でせうか。

先頃から阿彌陀様のことを色々御
話しになつて居られますけれど
も、神秘的な感じがないやうであ
ります。その邊如何でせうか、御

教へ下さい。(東京・文京區・大塚

K K 生)

(答)

神秘と云ふことが佛教で
「不思議功德」と云ふや

うな廣い意味のものと、奇蹟とか
又は魔術のやうな狭い意味のもの
と二通りあるやうに存じます。そ
の何れを指して居られるのか、御
質問が簡單なのでハッキリ分りま
せん。然し一應御答へ致します。
魔術のやうな奇蹟のやうな神秘
は所謂「小神秘」でありますが、

多くの人は之に驚くやうであり
ます。病氣をなほすとか、相場が
あたるとか、幸福になるとか、災
難からのがれるとか、さう云つた
功利的な不思議が強調されるのは、
多く迷信であり類似宗教でありま
す。

然し正しい宗教殊に佛教では
「正法に不思議なし」と云つて居
るやうに奇蹟的なことは取りませ
ん。但し色々奇蹟的なことを云つ
て居るのは、後に付け加へられた
ものであります。各宗の祖師の傳
記などに多く奇蹟を云つて居るの
も、亦た後から付隨させた最負の
引倒しであります。然しこれらに
引きかへて一見平凡のやうに見え
ますが、深く考へると、實に大奇
蹟であると云ふのがあります。そ

れは不思議功德として認めて居
るもので、例へば天地の現象は實
に奇怪極まるもので、穀や種を蒔
くと何うして芽が出るのか、また
太陽の光熱や肥料などに依つて、
その芽がどう云ふわけで生長する
のか、また雌雄両性で何故に子孫
の存続が出来るのか、また食物が
何うした譯で血となり肉となり骨
となり毛髪となるのか、また何故
に生物に取つて水が必要なのか、
そして空氣が必要なのか、また何
故に空氣の中に色々のもものがまざ
つて居るのに酸素だけが自然に選
ばれて肺の中に取り入れられるの
かなどと考へれば考へる程不思議
なものばかりが世界中に充ち満ち
て居るのであります。然るにから

ないで、逆に小さい不思議のみが
不思議がられて居るのは、丁度太
陽の大きな光は何とも思はれない
けれども提灯の小さな光が逆に感
謝されるのと同じことでありま
す。つまり大きな恩寵にはなれ切
つて當り前と思ひ、小ぼけな恩寵
だけを特別に有り難がつて居るの
は正しく功利主義であり我儘であ
つて、凡そ宗教に遠ざかること極
めて大であります。

このやうに同じく神秘と云つて
も性質が全然異なるのであります。
西洋奇術とか手品とか云ふものは
西洋に於て宗教傳導者の間に用ゐ
られたもので、我國でも伴天連法
とか切支丹法とか云はれた奇術が
あり、また支那の道教に於ては道
術と云ふ奇法が行はれ、印度に於

ても現在ヒンヅー教徒の中に催眠術的技術が用ゐられ、また昔は戦術の中に忍びの術として飯綱使用など云ふ色々のものがあつたわけでした。然しかう云つたものは宗教ではありません。唯だ宗教に利用されただけであります。

それ故からした小神祕小魔術は佛教では取上げません。従つて神通とか祖師傳中の奇蹟とかは本筋のものではありません。また神通に三明六通と云ふのがあります。「明」即ち叡智的なものと、又は六通の中の第六漏盡通即ち煩惱(漏)が盡きて心が自由になり本能的な欲望に左右されなくなつた状態をこそ尊ぶのであつて、眼がきくとか推量がするどいとか云ふやうな他の五通は採用して居ないのであります。それ故漏盡通なき神通は惡魔的通力だと云はれて居るのであります。

元來小神祕は科學の發達に依て段々影がうすくなつて行きます。原子爆彈のやうなものが若し大昔にあつたら神わざとして人々をしてどんなに宗教的な恐怖の中にはいらせたか分らないでせうが、今では同じ恐怖でも宗教的な神祕的な恐怖にはなりません。このやうに小神祕は段々神祕でなくなりまゝす。と云つて宗教が段々力を失つて行くとは考へられません。元來宗教でなかつたものが宗教の衣を着て居たのに過ぎないからです。また他の多くの宗教は人間以上の神祕的存在を信ずるやうになつて居りますが、佛教はさうではありません。佛教は無神論であり汎神論であります。と云つて大神祕を否定しては居りません。阿彌陀様とか大日様とか、宇宙的眞理の人格化即ち法身若しくは報身の不可思議功德に對しては極めて尊敬し且つ神聖視するばかりでなく感情的にも恩寵を頼むところの信仰行を實踐して居て科學の爲に決して力を弱めては居りません。但し同じく恩寵と云つても功利的な手前勝手な欲望を望んで居るのではあ

りません。基督教などでも「み心のままに」と云ふのであります。佛教でも「ご本願に乗托して」であります。ここが高等宗教のむづかしい點でもあります。即ち信念的には宗教的な情緒を養はねばならぬのに、理論的には何處迄も観智に訴へんとして居るからであります。感情と理智とが一致するに餘程感情が惱みに惱んで精練されなければならぬのであります。さればなまじいな感情ではこの點が納得の出来ないことでありませう。然し神祕は宗教感情をそそるものでありますから、大神祕に對

して合掌禮拜の出来るまで、こちらの感情を精練させねばなりません。そこに「南無阿彌陀佛」と口に出しそれを心に浮べて宗教的情操を養つて行く宗教行爲と云ふものが興へられて居るのであります。ここをハッキリと認識して頂きたいのであります。私のお答へが兎角理解をして頂くことに力を入れすぎて宗教感情の方をおろそかにして居る點は何とも申譯ありません。十分氣をつけますが、然し御質問もさう云ふ傾向のものにして頂くと結構だと存じます。

信仰は形式か精神か

(問)

信仰の上に色々な行爲があります。例へばお念佛

を稱へることなどがそれですが、私は信仰は精神上のものであつて必ずしもお念佛を唱へるとか、佛壇の前にすはつてお經を上げるとか云ふことをしなくともよいので

はないかと考へて居ります。ところが淨土宗の方々は頻りにお念佛を唱へなくてはいけないと言つて居るのは餘りにも形式に捉はれすぎた議論ではないかと思ひます。但し私は念佛を忘れて居るものではないです。心の中では朝晩念

佛を唱へて居ります。唯だ口に出さないだけです。それでよろしいでせうか。(静岡縣・沼津市・H K 生)

(答)

さう云ふお説は昔しから随分ありますが、それは要するに言譯に過ぎないと思ひます。と云ふのは「思内にあれば、色外に現る」と云ふ言葉もあるやうに、心に思へは必ず行爲とか言葉とかに現はれるものだからであります。また「思ふこと言はぬは腹ふくるる思ひ」と云ふ言葉もあるでせう。だから心で思つて居るだけで事足りると云ふことはありません。それは心で思ふことが深刻でなく淺つばちであるためにそんな言譯を云つて居るのに過ぎないのではないでせうか。

それが妥當であり眞實であるならば世界の宗教の内どれかがあなたの仰しやる形式無用論を言つて居なければならぬのに、一つとしてさう云ふものがありませんところを見て、あなたの論は要する理想論であつて實狀に即して居ないものであります。何となればそれはやがて宗教心も細つて行つて、しまひには宗教感情が失はれてしまふものだからであります。ことに佛教では「物心不二」と云つて形式と精神とは切つても切れぬものであると云つて居ります。形式を離れて精神なく、精神を離れて形式のないのが本當なのであります。それを切離して單なる形式となり單なる精神となるところに弊害があるのであり衰退があるのであります。この點をよくよく御諒解を願つて、法然上人の言はれた「行を以て信をすすめ、信を以て行をすすめる」とか、又は「時々別時を行じて信行を策勵すべし」とか云ふ御法語を味つて下さい。

御願ひします。

編集室より

△やうやく紙の配給がありました。不體裁なものを續けて發行してきましたが、今號から御覽のとり十六頁に復しました。今後この頁を維持してゆくつもりです。△編集も今迄の不充分さを補ふため内容を充實させました。吉田絃二郎先生も久しぶりにお書き下さいまして錦上更に花を添えしました。今後とも御執筆をつづけて頂きたく思つています。其他の原稿についても、内容の深いものばかりで、切に御愛讀をお願いいたします。△紙不足のため五月號から各雑誌は一齊に減頁いたしました。A五型(「浄土」の型)で最高六十四頁で各社とも編集と經營に非常な苦心をはらつてゐます。「浄土」も經營には四苦八苦です。宗務所の補助金でどうにかしのいできま

したが、今後の事を思うと淋しい限りです。他の雑誌の定價にくらべて廉價ですから、ぜひおすすめになつて會員を一人でもふやしていただきたいものです。

△それから近日中に紙代の不足分を請求いたしますから、どうかお納め下さい。會費が全納になれば經營の見透しはつきます。編集、事務とも奉仕的にやつてゐますので人件費はいりません。最小の經費ですから、會費がいり金の運轉がうまく行けば、もつともつといい雑誌が出せます。

△粗惡な雑誌の多いこの時代に、良心的な立派な雑誌を出したいものです。どうか皆様の御協力によつて「浄土」をますます向上させたいと思つてゐます。御援助を切にお願ひします。

浄土は皆さまの雑誌です。

投稿を歓迎します。

淨 土 讃 歌

鳴 海 要 吉

法然上人の、み教へを讃へまつる、四十八音文字の歌

こよひにたまきえほろふとも

をかへにうせぬゆりゑみつ

われらおちゐていそしめは

さけなんむねのやすくある

註 解 —

漢字交り譯

こ宵に魂消え滅ぶとも

丘邊に滅せぬ百合咲みつ

吾等落ち居て勤しめば

裂けなん胸の安くある

意 譯

夕刻に、この現身の生命（魂）がよしや消えほろぶ（死）ことがあり
 ましても、……

この廣い大千世界（丘の邊）には、不滅の生命（往き生きる無量壽）
 が尙ほ榮えつぎまする。……それ故、私共はお教へにしたがひまして
 身も心もしづかによく落着けて、唯一心に念佛を申しますれば、……
 今にも裂けようとして居る、煩惱ばかりのこの腑甲斐ない、か弱い小
 さな胸も、安らかに過させて頂けまする。有難い極みでございます
 る。

× × ×
 終りにのぞみ、同信の方々へお願い。歌の外の、題や、註解等には
 少しも確信はございませぬ。就きましては、それ等は申すまでも無く
 尙ほ曲譜等についても御心付きのことがございましたら、何くれと御
 教示賜はり度くお願い申し上げます。

（弘前市百石町小路四櫛方鳴海生）



篇 短

救 ひ

瀧 川 駿 一

やせほそつた顔、血の氣のひいたその土色の中に、おちくぼんだ眼が血ばしつてらんらんと光つてゐる。怒りと憎しみのいりまじつた異様な光りは、心臓をとめるかと思はれるほど、すごい壓力をもつてせまつてくる。

— ゆ、ゆるしてくれ。

武宮は手をあげておしのけようとしたが、手が動かなかつた。息がつまりさうだ。

— あつ、わるかつた。ゆ、ゆるしてくれ。

武宮は大きな聲をあげた。

— 誠二、どうしたんだい。またうなされて……。

横にねてゐる母親がやたらにからだをゆりうごかした。武宮はやつと夢からさめた。額には脂汗がねつとりじんでゐた。

— 夢だつたか。

武宮はおびえたやうにあたりを見まわした。微風にゆれてゐる蚊帳が、なんとなく無氣味に見えた。

— どうしたんだえ、毎晩、毎晩うなされて。母親は心配さうにうちわで風をおくつてくれた。武宮は返事もせず天井を見つめてゐた。

— 殺したヒリッピンの奴等が俺にしかえしをしてゐるんだ。

武宮は心の中でつぶやいた。毎晩のやうにやせほそつた顔がせまつてきておびやかすのであるが、その顔は毎晩かはつてゐる。ヒリッピンで上官の命令で殺した、いや終りには俺が買つて出たこともあるがあの弱々しい市民たちの怨靈が、いれかはりたちかはり、俺に復讐してゐるのだ。武宮はいらいらしながら右に左に寝がへりをうつた。早く夜が明けてくれればいゝと思ひながら……。

武宮は善良な人間だつた。戦争だと言つても、すゝんで人を殺せるやうな兵隊ではなかつた。ヒリッピンに上陸した當時は、度胸をつけるんだ、一突きやつてみい、と古參兵にしつこくすゝめられても、抵抗をうしなつてゐる捕虜を殺す氣にはどうしてもなれなかつた。捕虜が處刑場に連行されてくる日などは、どうしてのがれたものかと、一

日おどおとしながら逃げまはつたものである。それが無理に上官の命令で一突きして以來、しだいにうすらぎ、しまひには一種の興味すらおぼえるやうになつた。

— 殺さなきやこつちがあぶないんだからな。

それでも時々、こんな言ひわけを心にくりかへしてゐた。或日のことだつた。戦友とその日の殺しぶりを得意に語りながら兵舎に歸つてくる途中、瀧澤伍長にはつたり出會つた。

— 武宮、ちよつと話しがあるが……。

瀧澤はさう言ふと、大きなマソゴの樹影につれていつた。

— 武宮、貴様はすつかり人が變つたな。殺すのがいやでにげまはつてゐた時のことを思い出してくれ。戦闘中ならいざしらず、がんにじがらめにしばられてゐる奴等を殺すなんてことは、まつたく慘こくだよ。佛教には罪をにくんで人をにくまずといふ言葉があるが、奴等が日本に反抗するにはそれだけの理由があるんだ。よし奴等が悪かつたにせよ、簡単に殺すなんて事は人道に反したことだ。上陸當時のあの氣持にかえつてくれ、あれが貴様の本心だ。殺される身にもなつてくれ、親もあれば子もあるんだよ。

瀧澤はこんこんと説得した。しかし、血にうえてゐた武宮には、その言葉は耳にはいらなかつた。坊主なんていふ者は戦争の邪魔になるばかりだと、かえつて心の中では輕蔑してゐた。

終戦になつて内地に歸つてきても、自分のおかした慘虐行爲を反省

してみる氣持にもならなかつた。ところが、戦犯者の裁判がすゝむにつれて、日本軍のおかした惡虐な罪惡が次々にあばかれ、世界は有史以來の慘虐行爲だと糾斷し、日本人ですらあまりの暴虐さに目を見はじめた頃から、彼の心はしだいにくもつてきた。日がかさなるにつれて、人を殺してゐる夢を見るやうになつたり、行きずりの人の中に殺した者の顔を思ひ出したり、なにか目に見えない力が彼を責めはじめた。いつもおひかけられてゐるやうな、落着きのない生活にあげくれた。が、その頃までは、まだどうにかごまかせることができた。

瀧澤の言葉もまだ胸に思ひ浮んでこなかつた。

しかし、この四五日來、殺した者がのしかゝるやうにせまつてくるおそろしい夢を毎晩つゞけて見るのである。夢の間だけではなく、そのやせほそつた顔は、一日中彼の胸の中に生きてゐる。忘れようとすればするほど、ますますいろんな顔がうかんでくる。目に見えてげつそりやせた。しだいに死に追ひつめられていくやうである。殺した者に殺されるのか、怨靈といふやうな者をはじめて考へはじめた。

考へるに従つて、底しれぬ恐怖と深い悔恨にさいなまれた。このまゝでつきすゝめば、自ら命をたつより外に方法はないやうにも考へられた。

浮浪兒後日

合 田 微 雪

列車内にお母さんに似た人を發見した。どうせ切符無しで乗込んだ浮浪兒だもの。どこの驛だか知らないが其のをばさんの後をつけて降りて行つてやつた。

をばさんの家は田舎のお百姓屋だつた。

「どうしたの、何か用？」

家の前で、遂々みつかつて、こゝう咎められると、「お母さんに似てたから」とはとても云へない。仕方が無いからつひ、

「何か働かせて下さい。」

と云つて仕舞つた。をばさんはうさん臭さうにジロ／＼僕の顔を見下してゐたが、奥に入つて大きなお握りを拵へてきて、

「これを食べたなら直ぐお歸り」

とつゝけんどんに云つた。

おにぎりを食べてしまふと、其儘行くのは何だか借金してるやうで氣が済まない。それで散らかつ

てゐる其處ら邊りを掃き始めた。其時此家のをぢさんが戻つて来て「もう日暮れだから一晩位泊めてやれ」

と、澁るをばさんに命令した。

翌朝、

「わたしは今日少し寒氣がするから、お前をぢさんと一緒に町へ行つてお呉れ」

と云つた。何をしに行くのかと思つたら、遠い町の家々に下肥を貰ひに行くのだつた。臭くつて面倒で嫌な仕事だつたけど、平氣でやつてゐるをぢさんの顔を見てゐると、そんな事とても云へない。

一日中手傳ひしたんだからと、

もう一晩泊らせて呉れた。その代りに水を汲まされ、風呂を焚かされた。

其翌日は、下肥を畑にやる仕事を手傳はされた。

もう一晩泊つてその翌日、畑を

耕し、種を蒔いた。へト／＼に草臥れて、もう此方からずらかつてやらうと思つたが、をぢさんは云

つた。

「斯うして置くと、ぢき色んなものがどつさり穫れるんだ。」

其日の夕方、云ひつけられないうちに風呂を焚いたらをばさんが「今日は一番風呂に入つてもいいよ。」

と云つてくれた。

それにしても、何て忙しい家なんだらう。バクチをしたり、いろんな事を考へたりしてゐる暇などあつたればこそ。だが、どんなに忙しくても、をぢさんをばさん達は、朝夕佛様にお供へ物をする事だけは、一度だつて缺かした事が無い。

「これが人間として生きてきたお役目だ。それが嫌ならまたルンペンになれ」

云ふ事はエゲツないが、をぢさん達、どう考へてみても、非道い人間では無いやうだ。

「勉強さへすれば、家の手傳ひなんかしなくつても可いんだぜ」
とも云つて呉れた。

「浄 土」 六月號

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和廿二年五月二十日印刷

昭和廿二年六月一日發行

(定價三圓)

東京都芝區芝公園淨土宗務所

編輯兼 眞 野 正 順
發行人

東京都神田區神保町三ノ一〇

印刷人 春山治部左衛門

東京都神田區神保町三ノ一〇

印刷所 共立社印刷所

配給元

東京都神田區淡町路二ノ九

日本出版配給株式會社

發行所 法然上人續仰會

東京都芝區芝公園淨土宗務所

振替東京八二一八七番

會員番號B一〇八〇一四

會費 金四十二圓
一ケ年

(送料六圓を含む)

振替拂込みはすべて一圓五十錢増のこと